

支部通信

日本山岳会山梨支部 第3期第17号

令和6年12月15日

第5回「子どもと登山」を振り返って

山梨県山岳連盟と共催して、山の日記念の「子どもと登山」を令和6年8月10日、飯盛山（めしもりやま、1643メートル、長野県南牧村）で実施した。このイベントは5回目になる。従前「家族登山」と称していたが、今回「子どもと登山」と呼称変更をした。また、このイベントは山梨県の「令和6年度やまなしで過ごす『山の日』関連イベント」としての行事でもある。公募した参加者27名（9組、子ども15名、親・付添人12名）にスタッフ15名（看護師1名）の、総勢42名により盛大に実施した。

飯盛山は、山梨県（北杜市清里）と長野県との県境近くの山で季節を問わず登山者やハイカーに人気の山である。山名の由来は頂上部分でご飯を盛ったような形をしているからだと言われる。

朝9時に野辺山高原平沢峠の獅子岩駐車場に集合。準備体操のあと全員で記念撮影をし、3グループに分かれて登山を開始した。2度の大休憩の都度、水分補給をして、時折快い涼しい風が吹く中を進み、飯盛山に登頂した。山頂直下の小広場で昼食後、大盛山（1650m）の展望台で360度の景色を楽しみ、往路を引き返した。道すがら、子どもたちに山道の歩き方や山の花の名前、遠くに見える山名などを説明した。

陽射しは強かったもののそよ風が吹き抜け、マツムシソウやアサマフウロ、コオニユリ、アザミなどが咲き乱れ、眼前には八ヶ岳連峰、南アルプス北部の山々、近くには茅ヶ岳、男山や天狗山、奥秩父の山並みなど素晴らしい眺望が広がっていた。

スタート地点に下山後、プチクライミング組と植物観察組に分かれてのひとときを楽しんだ。獅子岩では、恐る恐る岩に手をかけながら登る子どもや進んで二度三度興じる子どももいて、みな大喜びだった。

締めくくりは、JR小海線野辺山駅近くのポッポ牛乳でおなじみのヤツレン工場売店でソフトクリームを参加者全員でいただいて、午後3時に散会した。（北原孝浩）



第10回「やまなし登山基礎講座」を終えて

やまなし登山基礎講座を、9月から10月にかけて開催した。10年間実施した「山の博覧会」に続く事業として取り組んできた本講座も、10回を数えるに至った（第7回は中止）。今回も、会員各位の協力により無事に終了することができたことに感謝する。



4月・5月の理事会で実施要項を検討し、開催までの作業工程、講座内容、会場、講師、チラシ作成、周知方法などを確認した。受講者募集については、各市町の図書館等の公共施設等へのチラシ設置依頼、ホームページ・SNSでの情報提供など、あらゆる手段を駆使して周知を図った。その結、開講条件下限の受講者数10人の受講生が集まった（前回13人、前々回14人）。山梨学院の支援がなくなり、受講生確保は今回も困難だった。

講座は、従来同様の内容を設定。初心者を対象に登山の基礎的知識・技術を講義するとともに、登山に伴う危険回避について講座全体を通じて指導した。また、日本山岳会の活動理念である山の文化的側面の啓発のため、登山史や山岳文学、山岳写真等の講座も設けた。

実践登山は2回実施。第1回は茅ヶ岳山麓で、地図読み・ロープワーク・セルフレスキューを指導

した。第2回は高川山に登頂し、地図読み・山岳写真などを含めた総合登山を実施した。いずれも真剣な実践登山講習であったとともに、受講者どうし、受講者と支部員の親睦を深める実り多い実践講座だった。

平成27年に第1回を開催するに当たり、「10回の実施を目標とする」との方針が立てられた。したがって、今回は節目の位置付けによる開催だった。実質9回の講座に参加した受講者はおよそ200人。この中には、講座後入会した方も少なくない。大きな成果を上げた事業だといえるだろう。今後の事業方針については、会員からの意見を踏まえ、理事会で検討することになる。有意義かつ過剰負担にならない取り組みを模索したい。(矢崎茂男)

第65回「木暮祭」

第65回「奥秩父の父」をたたえる木暮祭が10月19日・20日、木暮碑委員会により開催された。5年ごとの開催年は大々的な記念祭だ。本年は共催した山梨県山岳連盟の総合研修会、前夜祭へと続く流れだった。

19日17時、みずがき山リーゼンヒュッテ講堂にて、北杜市上村英司市長が、木暮理太郎と、自身が初めて登った金峰山について語られた。続いて矢崎茂男理事が「木暮理太郎と大島亮吉」と題して講演。「木暮と大島、宮沢賢治は山を通じてつながっている。とくに奥秩父」という言葉が会場に余韻を残した。

18時半から前夜祭。主催者挨拶として山梨岳連小宮山稔会長、古屋寿隆支部長が、ご参加の皆様へ謝辞を述べた。来賓のご挨拶を日本山岳会橋本しをり会長、理太郎生誕の地・群馬県太田市の「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」浅海崇夫事務局長から頂戴した。続いて来賓のご紹介、乾杯から宴席が始まり、前夜祭締め括りは橋本会長と東条理事による「岳人の歌」の合唱だった。

翌20日、朝8時からの記念登山は、甲斐百山に選定されている「魔子の山」へ。途中稜線からは、12歳の木暮理太郎に「紙鳶の糸を巻くことさえ忘れて怪しくも山に魅入られ(中略)愛する外に仕方なかった」(『山の憶ひ出』)と言わしめるほどの山、金峰山が見えた。

14時より、金山平にて第65回木暮祭碑前祭を執り行った。献酒、献花、主催者挨拶、来賓挨拶、とプログラムが進行した。

「国内外の自然の探求に力を注いだ木暮先生を精神を引き継ぎたい」との橋本会長の言葉は、背筋の伸びる思いがした。また、浅海事務局長が紹介された木暮理太郎年譜は「いつまでもたっても未定稿」なのだそう。その理由が印象的だった。献杯の後「明治期、金峰山に登った人たちと紀行文」と題した内藤順造氏による講話を聞き、皆で静かに理太郎翁を偲んだ。閉会の言葉、碑を囲む集合写真、碑前祭は幕を閉じた。



15時から恒例の「ほうとう食う会」。これは地元観光協会による、嬉しいおふるまいだ。ご参加ご協力していただいた皆様へ感謝申し上げ、木暮理太郎翁の功績の顕彰、永続的な山岳祭の継承を旗幟(きし)鮮明にし、また皆様とお会いできることを期待したい。(石澤貴子)

第11回「中部ブロック4支部交流会」を開催

越後・信濃・山梨・静岡で構成される中部ブロック4支部交流会が、11月16日、17日の2日間、山梨支部主催で八ヶ岳南麓清里高原清泉寮において開催された。清泉寮は景勝の地にあり、南に世界文化遺産の富士山、東に甲武信ユネスコエコパークの金峰山・瑞牆山など、西に南アルプスユネスコエコパークの甲斐駒ヶ岳・北岳・鳳凰山、北に八ヶ岳連峰を望むことができる。越後支部4名、信濃支部8名、山梨支部21名、静岡支部9名、総数42名が参加した。4支部の活動報告、記念講演、懇親会、記念登山と、充実した2日間の交流会となった。

16日13時40分、交流会が始まった。山梨支部小宮山稔監事(山梨県山岳連盟会長)の歓迎のあいさつ、古屋寿隆支部長の主催者あいさつの後、各支部の年間活動報告が行われた。

各支部の国内外の登山活動、登山講習会、山岳祭などの明るい報告があったほか、共通する話題は、各支部会員の高齢化、会員数の自然減と新入会員の獲得の難しさなどの悩ましい話。山梨支部では過去10年間初心者向け登山基礎講座を開催し、それが新会員獲得の重要な位置づけになっていること、またオンライン会議では無料ZOOMよりLINEの方が使い勝手が良いなど、貴重な情報交換の場になったと思われる。

その後の記念講演会では、山梨支部矢崎茂男理事による「古屋五郎―山と人を愛した男―」と題した講演があった。あまり世に知られていない、明治43年（1910）甲斐駒ヶ岳の麓に生まれ育った古屋五郎の人となり、南アルプス国立公園制定に向けた活動などが紹介された。

18時30分、懇親会が始まった。各支部の交流が深まるようにと、参加者はそれぞれ指定のテールに着いた。歓談の後、各支部の自己紹介などで交流した後、二次会会場に移動し、22時30分まで懇親を深めた。

16日の曇天、夜の雨と打って変わって翌17日は晴天、この時期にしては気温の高い一日となった。記念登山グループは3班に分かれ、八ヶ岳横断歩道(※)に向かった。一部の参加者は、清泉寮周辺の散策とポールラッシュ記念館見学で過ごした。

登山グループは車に分乗し、八ヶ岳横断歩道の入り口、美し森駐車場に向かった。8時30分登山開始。美し森までの木道から富士山、奥秩父、南アルプスの大パノラマを楽しんだ。羽衣の池まではややきつい登りではあるが、その後は穏やかな登山道が続いた。途中川俣川東沢を渡渉したのち、県営八ヶ岳牧場の草原に出る。草原を横断し、展望見晴台で富士山や南アルプスの景色を楽しんだのち下山、八ヶ岳横断道路に出た。歩道を行き東沢大橋で八ヶ岳主峰赤岳と紅葉を楽しんだ後、12時、清泉寮に戻った。解散のあいさつの後、清泉寮前の広場で三々五々、準備されていたお弁当で昼食をとり、帰路に就いた。



今回の4支部交流会は、静岡支部主催で令和7年10月4日～5日、伊豆で開催される予定である。

※【八ヶ岳横断歩道】真教寺尾根經由赤岳登山口の美し森から編笠山登山口の観音平を結ぶ遊歩道。記念登山ではその一部を歩いた。（大澤純二）

山行報告

【笠無(かさなし)】

■山行日：令和6年6月8日（土） ■地図：2万5千図「谷戸」

■行程：北杜市役所高根総合支所―林道比志海岸寺線登山口―山頂―見晴らし岩往復―建石―登山口―高根総合支所

■参加者：小宮山千彰、北原孝浩、渡辺峯雄、大澤純二、上田謙治、小嶋数文、白田晶美、松村明子、矢崎茂男

甲斐百山を巡る山行の一環として、北杜市の笠無に登った。笠無は、国道141号線沿いの箕輪辺りから指呼の間にそびえる山。笠の形状を備えた山容端麗の山であるが、意外にその存在と名前は知られていない。近くて遠い里山である。

山行日は快晴。北杜市役所高根総合支所から車2台に分乗して林道比志海岸寺線の登山口へ。身支度を整えて枝林道に分け入った。これをわずかにたどった先で左の尾根に取りつく。枝にこんもりとした鳥の巣があり、中に2羽のひなと2個の卵。人が触れると親鳥が巣を放棄することがあるという。そっとその場を離れた。

里から見上げると曲線美を呈する笠無であるが、この曲線は胸突き八丁の急登である。小刻みに休憩をはさみ、ハルゼミやツツドリの合唱に耳を傾けながら高度を上げていく。山頂に着いて一服後、東の尾根上の見晴らし岩を往復した。いつの間にかガスが湧いて、眼の前に展開するはずの八ヶ岳の大観に歓声を上げることはかなわなかった。

山頂に引き返して昼食。その後、この山の山名由来についてミニ講座を開催した。笠の形をした形状から冠せられた名前であることは理解できるものの、「無し」とはどういう意味なのか。これは、諏訪の風鎮めの「笠無神事」や、北麓の風除けを願う「風の三郎社」との関連から、風にまつわる諏訪の信仰が深く影響しているのではないかとというのが、筆者の仮説である。各人各様、研究してほしいと結んだ。

12時過ぎ、建石を経由する尾根を下った。建石とは自然石が石碑のように立ち上がっている大岩である。命名者は不明だが、この山に名所を設けたいとの善意が伝わってくる。ここを過ぎると伐採地が続く、南から東にかけての大展望が広がった。

ユアジサイの咲く枝尾根を分けて林道へ。予定時刻通りに下山を終了した。近くて遠い里山が、今後いっそう日を浴びてほしいと願う。（矢崎茂男）

【三ツ峠】

■山行日：令和6年6月16日（日）・17日（月） ■地図：2万5千図「河口湖東部」

■行程：16日 金ヶ窪沢登山口ー三ツ峠山・木無山花観察ー三ツ峠山荘ー交流会ー除草作業ー懇親会ー三ツ峠山荘（泊）

17日 三ツ峠山荘ー三ツ峠山花観察ー三ツ峠山荘ー母の白滝ー富士浅間神社

■参加者：磯野澄也、平松清子、萩野有基子、臼田昌美、遠藤辰也、中田雅弘（2日目）、黒沼英美・高橋みゆき・手崎喜美子・石澤貴子（日帰り）

昨年のJAC自然保護全国集会高尾の森づくり研修での本部・多摩支部との交流から、今回の三ツ峠の高山植物交流会開催となった。JMCA本部自然保護委員会でも三ツ峠で学習会があり、小高委員長はじめ16名、JAC多摩支部河野委員長以下9名、本部自然保護委員会下野委員長と委員の2名、山梨支部11名（講師の中村光吉さんを含む）が参加した。

初日、山梨支部は金ヶ窪沢登山口から山岳レインジヤを兼ねて山荘まで高山植物等を学んだ。普段何気なく通り過ぎる登山道沿いの植物を知ると、また楽しみが増えることを実感する。山頂・御巢鷹山手前までの高山植物観察では、年々減少するカモメランが大変気になった。昼過ぎに三ツ峠山荘に集結して交流会を開催。団体ごとに自然保護活動の紹介を行った。交流会後は中村さんの案内で、木無山の柵に囲われたアツモリソウ、キバナアツモリソウの美しさをじっくり味わった。テンニンソウ除去作業を行いながら、中村さんの地道な保全維持活動に頭の下がる思いがした。夜には本部・多摩支部・山梨支部の懇親会もあり、他の団体の活動を学ぶ有意義な場だった。



翌朝は快晴。爽やかな展望が広がっていた。朝食前に山頂・屏風岩周辺を散策し、植物観察と史跡の学習を行った。食事後、多摩支部は保全作業、山梨支部は母の白滝経由で河口湖浅間神社に下った。途中、クサタチバナの群生を発見。浅間神社の大杉を見上げて歓声を上げ、解散した。参加者が様々な収穫を得ることのできた山行だったと思われる。（磯野澄也）

【笠ヶ岳】

■山行日：7月12日（金）～14日（日） ■地図：昭文社「槍ヶ岳・穂高岳」

■行程：新穂高温泉ーわさび平小屋ー鏡平山荘（泊）ー弓折岳ー大ノマ岳ー抜戸岳ー笠ヶ岳山荘（泊）ー抜戸岳ー笠新道ー新穂高温泉

■参加者：小宮山千彰、中田雅弘、高橋みゆき、加瀬 尚、湊 ちせ、橘 希代子

まだ梅雨明け前の週末。登山口の新穂高温泉は傘をさして出発、鎌田川左俣林道から小池新道に入った。橋のたもとに「槍ヶ岳へ」の標識を見つけ、ここから槍ヶ岳に至るルートを妄想する。秩父沢を渡る頃には傘をたたみ、シシウドガ原で現れた山並みに一同大歓声。撮影タイムを取りながら、ゆっくり鏡平小屋に到着。夕食後鏡池に行ってみる。青空に槍ヶ岳～大キレット～奥穂～西穂の稜線がくっきりと見え、湖面はまさに鏡。日が傾くと稜線が赤く、そして金色に染まり夕闇に沈んでいく。明日は晴れの予報。どんな絶景が見られるのだろうか。

翌朝弓折乗越に登ると、目の前にドーンと槍穂が現れた。北鎌尾根の凹凸がまるで生き物の背骨のようだ。その背骨にしがみついている自分を妄想する。ここからの登山道は、リーダー押しの大展望が広がっていた。私の人生初の山旅は水晶岳～双六岳であった。30年前の記憶が一瞬で蘇ってくる。いつか繋げて歩きたい。秩父平の美しいお花畑を通り、いよいよ笠ヶ岳山頂に立った。雲が湧いて山頂からの展望はなかったが、ここまで辿ってきた天空の散歩道に、皆大満足であった。全員で登頂できたことが嬉しくて、どの顔も笑顔で輝いていた。

翌朝は一面のガス、早々に下山を開始する。雷鳥の親子が現れて気をつけてねと挨拶してくれた。下りは笠新道。予報より早く雨が降り始め、滑りやすい岩場、気を抜けない急坂が続く。先を行くソロの女性が、登山に不慣れなのか道を間違え困惑している。中国の留学生で、最終バスに乗って帰るのだという。彼女を列の真ん中に入れて一緒に下山した。山で出会った小さな国際交流。素晴らしい仲間たちと、心に残る山行であった。皆さま、素敵な3日間を共にしていただき、ありがとうございました。

笹ゆりも 笑顔がゆるる笠新道 濡れて歩けば 絆深まる ー中田ー （高橋みゆき）

【乗鞍岳】

■山行日：令和6年7月20日（土）～21日（日） ■地図：昭文社「乗鞍高原」

■行程：20日 敷島総合文化会館ー乗鞍観光センターー畳平ー白雲荘ーお花畑ー乗鞍スカイラ

インー大黒岳ー鶴ヶ池ー白雲荘

21日 白雲荘ーエコラインー肩の小屋ー剣ヶ峰ー肩の小屋ー富士見岳ー白雲荘ー
豊平ー乗鞍観光センターー敷島総合文化会館

■参加者：平松清子、磯野澄也、遠藤辰也、荻原重行、末木佐登子、白田昌美、岩間明子、渡辺和美、松村明子、村田幸子

可憐な高山植物が咲き誇るお花畑と日本百名山の剣ヶ峰、満天の星空、御来光、初めての山小屋泊。家族の了承を得て、参加を申し込んでから期待に胸を膨らませて当日を迎えた。

梅雨明けし、うだるような暑さとなったので、ザックに入れておいた上着を1枚減らしてしまったことを後悔した。天気予報では曇りから晴れだったので、乗鞍観光センターからシャトルバスへの乗り継ぎ時の激しい雨もさほど気にならなかった。しかし、豊平へ着いた時には、徒歩3分の白雲荘へも行けない程の大暴風雨となった。それでも予報は昼前には晴れ。待機している間に高山植物のパフレットと味噌おでんを片手に学習会となった。ミヤマキンポウゲとミヤマキンバイ、ミヤマダイコンソウ、ヨツバシオガマ、ハクサンチドリ、似ていて区別が難しい。

雨はなかなか止まず3時間の長居となった。剣ヶ峰登山の予定を変更して、バスターミナルで昼食を取り、小屋へデポして濃霧と強風と寒さの中お花畑へ向かった。幸い雨は止んだのでゆっくり散策することができた。初めて目にしたクロユリの群生、道端に咲くイワキキョウの紫が印象的だった。乗鞍スカイライン経由で大黒岳へ。霧の中だが、足元の花々が私達を楽しませてくれた。下山途中でパトロールの方から熊の目撃情報があった事を知らされ驚いた。

小屋では飛騨牛すき焼き豪華メニューに檜風呂、パリッとした白いシートのお布団。2段ベッドの上段3人用を1人で広々使わせてもらった。一晩中、風の唸り声が聞こえたが、小屋はストーブが焚かれ暖かく、とても快適な一夜だった。

2日目、濃霧と強風だがブロッケン現象の可能性に期待して向かったが残念だった。朝食を済ませ、霧の中、剣ヶ峰向かった。時々、霧が晴れる瞬間があり、雷鳥のつがいにも出会う事が出来た。ガレ場一面に流れるように咲いているコマクサの群生には、可憐なかに逞しさを感じた。山頂では運良く霧が晴れ、来て良かったと思える展望だった。雲の中だが、槍ヶ岳の頭を見ることが出来た。ベストシーズンだけあって登山者が長蛇の列で渋滞していた。

山行では天気の変化への対応、高山では真夏でも防寒対策をしっかりとすること、雨具の重要性を痛感した。天気予報に振り回されたが、充実した楽しい山行だった。(村田幸子)



【焼岳】

■山行日：令和6年7月26日(金)・27日(土) ■地図：2万5千図「上高地」

■行程：26日 北杜市役所ー沢渡ー大正池ー田代橋ー上高地山岳研究所(山研)ー明神池ー山研

27日 山研ー田代橋ー焼岳小屋ー展望台ー焼岳小屋ー田代橋ー山研ー上高地ー沢渡ー北杜市役所

■参加者：磯野澄也、平松清子、古屋寿隆、渡辺峯雄、手崎喜美子

焼岳は2000年頃、支部山行で登って以来四半世紀ぶりの再訪である。当時の山梨支部員はまだ全体的に若く、バスで朝からワイワイ飲みながら大変元気だった。

今回はのんびり山行と決め、初日は大正池を8時過ぎに発って上高地山岳研究所(山研)に向かった。新人の頃、当時の大正池には枯木が多数あり穂高を水面に映して風情があった。田代池は埋まり川わった。それでもやはり天下の上高地、美しい自然は健在である。ウェストン碑前では日本山岳会結成に尽力した山岳人に、古屋支部長が感慨深げに見入っていた。

3時間ゆったり歩いて山研へ。荷物をデポし明神池に向かう。生憎曇り空であったが、夏の樹木・高山植物・川のせせらぎなど、自然を存分に満喫する。山研ではご飯は出るが、おかずは手作りだ。女性のおかげで食卓が賑わってありがたい。意外にも、上高地は夜は暑かった。

翌朝は爽やかに晴れ渡った。7時に山研を出発し焼岳へ。登山口には流石に活火山であるため「自己責任」の文字がしつこいほど表示されていた。極力、山頂に立ち入らないよう注意喚起されていたので、予め山頂へは行かないことにしていた。樹林帯を登る。途中で休憩とっているとサルが出現。一向に人を気にする気配がない。樹林帯を抜けると峠沢と焼岳の荒々しい山容と噴煙が確認出来る。2000メートル付近の垂直なアルミ梯子を乗り切りジグザクの登山道をたどって、新中尾峠を越えると

焼岳小屋に到着した。

焼岳の全容が見える展望台には15分くらいで着く。所々の生暖かいガスが噴出し不気味だ。山頂はじめ、西穂高岳・奥穂高岳・笠ヶ岳、眼下には上高地・新穂高温泉と大展望が広がる。大自然を満喫し、2時間強で登山口で下山した。

ゆったりとした2日間の山行。皆満足感に浸り上高地を後にした。(磯野澄也)

【男山・天狗岳】

■山行日：令和6年8月18日(日) ■地図：2万5千図「御所平・信濃中島」

■行程：敷島総合文化会館駐車場—JR野辺山駅前駐車場—馬越峠—天狗山山頂—垣越山—男山山頂—天狗山山頂—馬越峠

■参加者：小宮山千彰、手崎喜美子、加瀬尚、湊ちせ

快晴の朝敷島の集合場所から乗り合わせで野辺山に向かった。野辺山駅前で湊さんと合流し馬越峠へ。峠の駐車場からすぐに急登が始まる。歩き出しからこの急登はきつい。一汗かいたところで鎖場が出てきたが、皆3点確保で快調に乗越して、登山開始から1時間30分ほどで天狗山山頂に到着。

浅間山、八ヶ岳、奥秩父の大展望だ。小休止の後男山へ向かう。一旦縦走路の鞍部まで下るが岩の急坂で気が抜けない。垣越山付近は下山路が何本もあり迷わないよう注意が必要だ。男山直下は急な岩場であったが危険な箇所は無く全員で山頂に立った。

山頂で昼食を摂っていると、男山ダイレクトのクライミングをして登ってきた2人に会った。ここは岩山でクライミングのルートも何本もあり格好のグレンデになっている。山頂での展望を楽しんだ後、同じルートを下山。途中天狗山の下山路鎖場でロープを使い下山確保の練習をして遊び、無事馬越峠に到着。帰りに川上村のスーパーで地酒や野菜を買って帰路についた。暑かったが爽快な登山だった。(小宮山千彰)

【富士山奥庭】

■山行日：令和6年9月14日(土) ■地図：2万5千図「富士山」「鳴沢」

■行程：奥庭—三合一—二合一—一合一—長尾山—富士風穴—精進湖登山口入口

■参加者：磯野澄也、北原孝浩、小島数文、白田昌美、小池雄一郎、遠藤辰也

シーズン終了して間もない富士山精進口登山道をひたすら下山。この道は大正12年に精進湖から山頂までのルートとして開設された。今回は富士スバルライン奥庭から県道71号線(富士宮鳴沢線)まで約1200メートルを降下した。

まず下山口の県道71号線に車をデポしてから富士山駅に向かい、そこからバスで奥庭まで移動。奥庭を散策して、見上げる富士山とパノラマを堪能したあと下山開始。奥庭付近はダケカンバやシラビソが多いが下山につれてカラマツが増えてくる。四合目付近は苔の森の色が鮮やかでついつい足が止まる。途中倒木も数か所あったが勾配はきつくなく歩きやすい。

三合目で昼食。ここはスバルライン五合目から降りてくる道や河口湖町からの船津口登山道と交差しており明るく開けた広場になっている。9月とは思えない暖かい空気の中のんびりと時を過ごした。出発してすぐスバルラインをくぐり、クマザサやシラカバが増え始め植生の変化を感じる。二合目を過ぎ、ふじてんリゾートスキー場の上部をかすめて長尾山に向かう。長尾山は今回の山行の目的の一つで、894年の貞観大噴火により多量の溶岩を流し、当時あった大きな湖(せの海)を埋めて西湖、精進湖、本栖湖を作った山らしい。そのような大きな地殻変動を起こした山とは思えないほど小柄な山だったが、歴史に思いを馳せるには十分な鬱蒼とした森でもあった。

その後大室山の横を抜けて富士風穴で小休止、そしてデポした車に到着。約7時間かけてゆっくりと下山したが、ほぼ下りだけの山行は初めてで、前太ももの筋肉だけが張るといふ普段とは異なる疲労が出たのが面白い経験であった。また息が切れることがないので、先輩方の体験談を歩きながらいろいろ聞いて勉強になった。たまにはこのような富士山の楽しみ方もいいと思った。(遠藤辰也)



【鳳凰山—辻山・薬師ヶ岳・観音ヶ岳—】

■山行日：令和6年10月12日(土)～13日(日) ■地図：2万5千図「鳳凰山」

■行程：12日 夜叉神峠駐車場—夜叉神峠小屋—辻山—南御室小屋—薬師岳小屋

13日 薬師岳小屋—薬師ヶ岳—観音ヶ岳—薬師岳小屋—夜叉神峠駐車場

■参加者：石澤貴子、古屋寿隆、村田幸子、加瀬 尚、鈴木 明、湊 ちせ

いつも眺めている鳳凰山。あんな高い山に登れるかしらと不安もあった。学生時代に元登山部の友がいて、女4人、屋久島や東北の山に登ったが、約45年全く登山をしていなかったからである。昨年限山歩きとトレーニングを始めた。一人で歩く力をつけたくて登山講座も受講した。鳳凰山山行に受講生も可とあったので、せっかくの機会と思い応募を決めた。

10月半ばの朝6時。夜叉神峠駐車場からリーダー石澤さん、私、加瀬さん、鈴木さん、村田さん、サブリーダー古屋さんの順番で歩いた。秋の陽が木々の間を揺れ輝く中、緩く時には急にまた緩くという道を長く歩いていく。予定通り2時過ぎに薬師岳小屋に到着。小屋の外のテーブルを囲んで皆で乾杯。山は冬のように寒く上着を着込んでマフラーという装いである。リュックに残った食べ物を各々配る。ピーナッツなどのつまみになるものが思いの外嬉しい。

次の日の朝、小屋近くの砂払岳に日の出を見に行く。富士山と雲の中から赤く出てくる太陽。南御室小屋キャンプ場から登ってきた人達も、皆それぞれ静かにシャッターをきっている。朝の光に照らされた木々の上に薬師岳がくっきりと山容をみせている。

朝食後、薬師岳・観音岳へ。薬師岳頂上視界良好、観音岳では雲で地蔵岳方向は全く見えない。山での一瞬の雲の流れの速さに驚く。帰路も順調で、夜叉神峠では小屋の豚汁を食べながら皆で輪になって話す。夕べの酒席とはまた違ってお話が古屋さんからあった。地図読みや時間配分の大切さ。リスク管理の大切さ。レスキューシート、雨具、ヘッドランプは常に持つこと等。

秋の鳳凰を楽しみ、山への向き合い方も学んだ2日間。リーダー石澤さんにも感謝。青空に高くそびえる鳳凰山、私あの場所に行ってきたんだと思うと嬉しい気持ちになるのである。（湊 ちせ）



【奈良倉山】

■山行日：令和6年10月26日（土） ■地図：2万5千図「七保」

■行程：道の駅こすげ（帰り車1台デポ）—鶴峠—奈良倉山—松姫峠—鶴寝山—大マテイ山—大ダワー—道の駅こすげ（運転手のみ）—小菅の湯

■参加者：磯野澄也、渡辺峯雄、小島敦文、遠藤辰也、鶴田陽子、岩間明子、荻野重行、渡辺和美、保坂美佐子、平松清子

奈良倉山は、山梨県大月市と北都留郡小菅村の境にある標高1348メートルの山で、富士山の眺めがよいことで定評がある。鶴峠登山口からスタートして、しばらく歩くと廃車トラック。中々の年代物である。また、いろいろなキノコや所々の紅葉がとても綺麗だった。奈良倉山山頂に着いて大休止。心地よい自然林の頂である。西の尾根を下り松姫峠へ。峠の名前は、武田信玄の娘である松姫が織田勢から逃れる際に、ここを越えたという伝承に由来している。立派なトイレがあつてありがたい。

松姫峠からは大菩薩峠へも登山道が整備されている。広葉樹の森が広がり、新緑やお花の時期、紅葉の頃は散策にオススメである。登山道には野生動物やここに咲く花の看板もあった。

大マテイ山という面白い名前を帰ってから調べてみた。「マテイ」は「惑う」が転訛したと言われ、その昔、里人がこの付近でよく惑わされた（間違った）のが由来だそう。しかもただ惑わされたのではなく、「大マテイ」だけに大惑いしたのかなと思った。

今回の山行は、植物の名前を覚えたり、地図読みしたり、紅葉に足が何回も止まったりと収穫が多かった。一日中ガスって富士山は見えなかったが、実に楽しい山行だった。（平松清子）

【御座山（おぐらやま）】

■山行日：令和6年10月27日（日） ■地図：2万5千図「信濃中島」

■行程：北巨摩合同庁舎—栗生登山口—不動の滝—前御座山—御座山—前御座山—不動の滝—栗生登山口—北巨摩合同庁舎

■参加者：相川 修、荻原賢司、石澤貴子、手崎喜美子、村田幸子、菊池千恵子、橘 希代子、山本かおる

暑くなく寒くもなく風もない穏やかな秋晴れの日。山登りに最高のお天気だった。

栗生登山口には、楽しく登れそうな気持ちにしてくれるイラストマップがある。そんなに時間がかからずに2000メートルより高い所に行くことができ、頂上は岩がゴロゴロで眺めが良いとのこと。とても楽しみでワクワクしてきた。安全に登ることを自分に確認しての出発である。

CLを先頭に歩き始めた。「ペースは大丈夫ですか?」「出来ればもう少しゆっくりお願いします」。山岳会の方には申し訳ない程ゆっくり登った。登りが結構キツイな一と思いながら足を運ぶと、水の音が聞こえてきて不動滝に到着、そして休憩。お菓子が色々回ってくる。初めてお会いする方や、初めてお話しする方ばかりだが、一緒に歩いているだけでとても親しくなった気がしてくる。不思議である。

青空が見えてきて紅葉も美しさを増してくる。黄色、朱色、赤、明るい黄緑、それに加えてダテカンバの白い幹と青空。自然が見せてくれる色彩の美しさに大満足である。

そして、いよいよ鎖場。慎重に確実に足を置いてゆっくり登る。CL・SLの指示の下、無事に通過できた。避難小屋を過ぎてすぐ、突然明るくなり岩場が現れた。「わーっ、着いたー」。視界が広がり、思わず歓声上がる。まさしく御座山、神様がお座りになって下界を見下ろすのに丁度いい平な岩がそこそこにある。祠の前で手を合わせ山の神様にご挨拶した。

周りの山々を眺め、山の名前を確認する。八ヶ岳、南アルプス、浅間山、両神山、遠くには槍ヶ岳も穂高も見えるではないか。下に見える村々も美しい。山々の眺めを堪能しながら、山に登れる幸せを思った。山岳会の皆様ありがとうございました。(橘 希代子)



トピックス

「貝伏山(静岡市清水区西里地区)里山水源の森復元事業」参加報告

駿河と甲州の国境の駿河寄り、静岡市清水区西里地区・興津川源流域に貝伏(かいぶし)という隠れ里がある。甲斐武士の意味である。武田が滅亡したのち、臣下がこの地に遁れ土着したと伝わる。この度、貝伏山の麓での植樹事業がNPO 静岡山の文化交流センターによって計画された。山梨にもゆかりのある土地ということで、NPO 代表の山本良三さん(JAC 静岡支部所属)からボランティア参加の声がかかった。山梨支部と岳連自然保護委員会で参加募集したところ、6名の参加者があった。



令和6年5月11日(土)9時、西里温泉駐車場に静岡支部の5名を含め20数名が集合し、植樹地貝伏山麓に向かった。植樹地は杉伐採跡の放棄地で、今回の植樹前に獣害防止ネットで囲まれていた。急傾斜地で、タケノコ掘り鋏を使って穴を掘り、広葉樹苗790本を移植した。樹種は、本来この土地に土着していたと考えられる、スダジイ、タブノキ、いろいろなカシの木などだった。晴天で気温が高い大汗の作業だったが、2時間ほどで終わり、解散した。

山梨からの参加者は、武田信玄ゆかりの田代峠が遠望できるところや、170年ほど前の安政元年の大地震で山から転げ落ちてきたという大岩を案内していただいた。

その後、西里温泉やませみの湯に浸った。露天風呂などゆったりとした秘境のいいお湯だった。昼食をここで頂き、山梨グループも解散した。

【山梨県の参加者：中村光吉、平松清子、遠藤達也、市川俊行、大澤さな枝、大澤純二】(大澤純二)

理事会報告

- 7月10日 第5回「子どもと登山」について、第10回「やまなし登山基礎講座」について第65回「木暮祭」について、中部ブロック交流会について、他
- 8月19日 第10回「やまなし登山基礎講座」について、第65回「木暮祭」について、山岳祭記念切手について、中部ブロック交流会について、オンライン登山説明会、他
- 9月11日 第10回「やまなし登山基礎講座」最終確認、第65回「木暮祭」について、中部ブロック交流会について、新人向け説明会・意見交換会の結果と課題、他
- 10月 8日 「やまなし登山基礎講座」修了式について、「木暮祭」「岳連総合研修会」について、中期公募山行・支部山行・個人山行について、他

発行 古屋寿隆(支部長) 編集 矢崎茂男(広報委員長)

編集者住所：408-0114 山梨県北杜市須玉町藤田502 TEL：090-7734-2788

Eメール：yazaki-s@taupe.plala.or.jp